

Stanley Hoppenfeld 著

患者の病態を正確に把握し治療や訓練にのぞむことは、医師ならずとも職務遂行上の鉄則である。とくにそれがリハビリテーション医学のように、全人間的アプローチを試みる動的医療分野では、患者の身体的活動性の如何を把握することが成功の基盤となる。そのためには患者の身体相の形態、運動、生理面での総合的評価が必要となるが、Dr Stanley Hoppenfeld を著者にもつ Physical Examination of the Spine and Extremities は、この意味からすればまさに的を射た書といえよう。

まずこの書は冒頭にわが国では忘れがちな、協力者に対する上下の隔のない、しかも惜しめない謝辞が述べられている。内容は9つの章よりなる評価法で、その中心を主要関節におき、上肢では肩、肘、腕、手と進め、それらの動きの固定性、支持性から頸椎をおき、奇異にすら感じる下顎関節の重要性を評価した点はすばらしい。下肢では活動性つまり歩行に着目させ、次いで股、膝、足と進め、上肢の場合と同じく腰椎にまで評価を及ぼせてい

る。

さらに詳細項目においては、まず各関節の構造に簡潔に触れ、それらの主要関節の外観からの望診のポイントを説き、次いで解剖学的な骨格基本部位の触診と、臨床に必要な軟部組織の触診に及んでいる。また動きの可動域については生理、解剖、機能的可動性の判別の一助となる、自動的可動性、他動的可動性を評価している。神経学的評価では神経統合性の意味から、筋力、反射、感覚の主要三要素に触れている。また特殊な評価として臨床上障害発見の容易な評価の方法を知らしめ、最後に関連周囲組織の評価でしめくくっている。このように基礎医学の知識に基づき臨床の評価を、明瞭でユニークな図を駆使し詳細にかつ系統的に理解させたことは見事である。医師のみならず療法師、看護婦いや医療従事者なら誰にとっても必読の書として、ここに推薦紹介させて頂く。

Appleton-Century-Crofts 発行, New York. (A.C.C.)

(九州リハビリテーション大学 和才嘉昭)

リハビリテーション医学全書 9

「作業療法総論」

田村 春雄 鈴木 明子 編

作業療法に関してはすでに2冊著書が出ているが、いずれも翻訳書で、アメリカとイギリスのものである。日本人自身の手になるものは本書がはじめてであり、この点での意義は大きからう。理学療法士及び作業療法士法が制定され、リハビリテーションの分野に理学療法士、作業療法士が活躍するようになってからすでに10年を経過し、ようやく日本の風土になじみはじめてきた。本書はそうした長年に亘る編者らの努力の成果として世に問うたものである。

本書は13章から構成されている。「第1章作業療法とは何か」で著者(鈴木明子氏)は作業療法の定義に関して従来になかった1つの新しい見解を提示しているのが注目される。すなわち「作業療法とは、医学分野では医師の依頼箋により、教育や福祉の分野ではチームを組む他の専門職からの依頼で、OTが対象の提示する問題点を見出し、医学的・心理学的・教育的・社会的効果

を出すために治療方針を立て、その上で行う諸活動を指す。一言でいえば、生き甲斐を感じるための具体的諸活動を助言するコンサルタントともいえる」(傍点筆者)。以下、作業療法の原理、リハビリテーションの流れの中での作業療法、作業療法の原理、作業療法の対象、治療的接近と指導、1人の作業療法士として、作業療法に用いられる手工芸とその指導法、日常生活動作の指導、身体機能とその対象、職業前部門における作業療法、作業療法士の成功と失敗、作業療法士の活動分野というように章分けされている。編者の田村春雄氏は日本の作業療法の父ともいえるべき人であり、一方の鈴木明子氏は日本最初の作業療法士として活躍中の方である。各章は府中リハビリテーション学院の講師が分担執筆している。今後、作業療法の教科書として役立てられるだろう。

(医歯薬出版, A5, 421頁, 6000円)

(東京都心障害者福祉センター 寺山久美子)